ブラジル系ニューカマー第二世代の「帰国」経験

児島 明

Return Visit of Brazilian Newcomer Second Generation

KOJIMA Akira

地域学論集（鳥取大学地域学部紀要）　第14巻　第2号　抜刷

REGIONAL STUDIES (TOTTORI UNIVERSITY JOURNAL OF THE FACULTY OF REGIONAL SCIENCES) Vol.14 / No.2

平成30年3月12日発行　　March 12, 2018

ブラジル系ニューカマー第二世代の「帰国」経験

児島　明*

Return Visit of Brazilian Newcomer Second Generation

KOJIMA Akira*

キーワード：ブラジル系ニューカマー，第二世代，帰国，家族の物語
Key Words: Brazilian newcomer, second generation, return, family narrative

Ⅰ．課題の設定

本稿の目的は，国境を越える移動がブラジル系ニューカマー第二世代の帰属意識の形成や将来展望におよぼす影響について，帰国をめぐる世代間の経験の相違および第二世代自身の「帰国」経験をめぐる語りに注目して考察することである。

ブラジル系ニューカマー第二世代に関する研究において，国境を越える移動は学校生活や進路形成に大きな影響を及ぼす要因として言及されてきた。そこでは主に，親世代の国際労働力移動にともなって生じる非自発的な移動によって，第二世代の学業継続や学校間の接続が中断され，移行上の不利益が生じる現状が描かれてきた（児島 2008）。そうした現状の解明が必要なのは言うまでもないが，他方で，移動の経験が第二世代自身によって自らのライフコースにどのように位置づけられていくのかについて，当事者の視点から理解することも重要である。第二世代がすでに次世代を育成する年齢にさしかかっている現状に鑑みれば，移動の経験に対してどのような意味付与がなされているかの理解は，それが次世代にどのように継承されるかを考えるうえでも欠かせない作業といえよう。とりわけ，日本をホスト国として過ごしてきた第二世代にとって，「帰国」は自らの帰属について改めて検討するための重要な契機となりうる。

ここで，「帰国」にカギ括弧を付すのは，日本生まれもしくは日本育ちの第二世代にとって，それが本来の意味における帰国ではなく，親の出身国への移動だからである。にもかかわらず，今回の調査において，日本生まれないし日本育ちであっても，自らのブラジルへの移動を「帰る」と表現するケースが少なからず存在していた。それを踏まえて本稿では，第二世代による親の出身国への訪問ないしそこでの滞在を「帰国」と表すことにする。ここでいう「帰国」には，余暇，病気の治療，結婚式や葬式への参加などを目的とした比較的短期の滞在から，家族揃っての日本からの引き揚げなど長期の滞在までが含まれており，第二世代からすれば自発的である場合もそうでない場合もあるが，いずれにしても，再度の来日により「帰国」を相対化できる立場にある者を対象にしている。

Ⅱ．先行研究の検討

海外に目を向ければ，移民第二世代の「帰国」に焦点化した研究は欧米を中心に一定の広がりを見せつつある。ここでは，その展開過程に即して先行研究の流れを概観しておこう。

*鳥取大学地域学部地域学科人間形成コース

移民第二世代をめぐる研究を牽引してきたのは，ポルテスを筆頭とするアメリカの研究者であることは間違いないだろう（Portes and Zhou 1993, Portes and Rumbaut 2001 など）。「分節的同化理論」として知られるかれらの研究は，移民の編入様式，親の人的資本，家族構造の違いにより，世代間にまたがる異なったタイプの文化変容が生じ，そのことが第二世代の一様ではない同化過程をもたらすとし，直線的な同化を自明視する古典的な同化理論を刷新するものとして後の研究に大きな影響力をもつことになった。しかしながら，これらの研究の関心は移民の「入国」に向けられていたため，「帰国」経験にはほとんど目が向けられなかった。むしろ，移民が形成するトランスナショナルな絆はエスニック・アイデンティティを強化するがゆえに同化の妨げになるとされ，そうしたトランスナショナリズムも第二世代においては消えゆく現象とみなされ重視されなかった。

一国内での同化過程のみを強調するがゆえに「方法論的ナショナリズム」としてその限界が指摘されることもある上記の研究に対して，第二世代が生きる現実により丁寧に寄り添う研究を展開したのが，やはりアメリカの研究者であるレヴィットやウォーターズらである（Levitt and Waters 2002）。レヴィットらは，第二世代のホスト国での成長において，トランスナショナルな経験は不可欠な構成要素であるとしたうえで，ホスト国の文化やルーツ国の伝統に受動的に身を任せるだけの存在ではなく，トランスナショナルな社会空間において自らの実践を創造する主体として第二世代を描きだした。こうした研究は，国境を越える人の移動がより身近な現実としてあるヨーロッパの研究者に多大な影響をおよぼすことになった。

移民の送出国と受入国との間の距離がアメリカほど離れておらず，越境移動に関する法的なあり方についてもアメリカとは異なる文脈にあるヨーロッパ諸国では，レヴィットらの研究に触発されながら，「帰還移民」（return migration）ないし「帰還訪問」（return visit）に関する研究が蓄積されてきた（Wessendorf 2013, King and Christou 2014, King, Christou and Ahrens 2014, Vathi and King 2014 など）。これらの研究の多くは，ホスト国が望ましい統合／同化のかたちをどうとらえるかは国によって異なるとの視点に立ち，第二世代がどの国で成長するかに関する比較研究の必要性を自覚しているところに特徴がある。アメリカの研究に欠けていた視点と言えるだろう。

翻ってブラジル系ニューカマーに関する国内の研究を概観すれば，日系ブラジル人の「エスニックな帰還」（ethnic return）に注目した Tsuda（2003,2009）や「一時的回帰の物語」に注目した児島（2006）の研究があるが，これらはいずれもブラジル系ニューカマー第一世代の経験を描いたものである。他方，第二世代を対象としたものとしては，帰国した第二世代のブラジルでの教育や進路選択を追跡したハヤシザキら（2013）、山本（2014）、山ノ内（2016）などの研究があるが，「帰国」が日本在住の第二世代にとってどのようなものとして経験されているかに注目した研究は，管見の限り存在しない。

Ⅲ．分析の視点

日本在住のブラジル系ニューカマー第二世代の「帰国」経験について解明するために，本稿では 3 つの視点から分析を試みる。

キングらは，外国人労働者としてドイツへ移住したギリシア人を親にもつ第二世代を，親から「常に帰ると言われながら育った子どもたち」であるとし，「帰還をめぐる家族の物語」（family narrative of return）が第二世代の「帰還志向」におよぼす影響について論じている

（King,Christou and Ahrens 2014, pp.42-43）。ここで示唆されているは，第二世代の「帰国」経験を，ホスト国での滞在に対する第一世代の意味付与との関連で理解することの重要性である。

そこで，第一の視点として，ブラジル系ニューカマー第二世代の経験を大きく左右する第一世代の移住経験を理解することの必要性が浮上する。筆者はかつて，主として出稼ぎ労働者として来日する日系ブラジル人が形成する「家族の物語」を「一時的回帰の物語」と名づけたことがある（児島 2006）。そこで描いたのは，滞在が目標金額を蓄えるまでの「一時的」なものであることを前提としつつ，他方で父祖の地への「回帰」としても自らの来日経験をとらえるかれらの意識のありようであった(1)。ただし，「一時的回帰の物語」は，ブラジル人の出稼ぎが本格化してようやく 10 年が経過した 2000 年前後の状況を背景に抽出したものであり，その後，2008 年秋のリーマンショックに端を発する世界同時不況をはさんで 15 年以上経過した現在，多様な展開をみせているものと思われる。さらに，第二世代の成長がそうした展開と密接に関連しつつあったことを考慮すれば，まずは日本への移住をめぐる親ないし家族の経験を理解する必要があるだろう。その際，第二世代の成長過程への影響という点で，「家族の物語」としてより本質的なのは滞在の一時性，すなわち帰国という前提であることからすれば，第二世代の経験を論じるにあたっては端的に「帰国の物語」としたほうが適切と思われるので，以下ではこの表現に統一する。

親によって語られる「帰国の物語」が，第二世代が成長する過程でどのような展開をみせたかを整理したうえで，次に検討すべきは，そうした「帰国の物語」の展開に対する第二世代の反応である。レヴィットは，アメリカにおける移民第二世代がホスト国への社会化の圧力や「故郷」の伝統保持への圧力に屈することなく，「トランスナショナルな社会空間」を創造的に生き抜く姿を描きだしたが（Levitt 2009），第二世代がみせるこうした主体性を見逃さないことは，本稿においてもきわめて重要である。親の出稼ぎとそれに付随する「帰国の物語」に巻き込まれながらも，第二世代が，自らが置かれた現実にふさわしい実践を創造的に生みだしながら「帰国の物語」に対する独自の対応を模索する過程を描出すること。これが第二の視点である。

そして，第三の視点は，「帰国の物語」に対する第二世代の反応形成に影響をおよぼす要因として，第二世代自身の「帰国」経験に注目するものであり，第二の視点を補完する役割を果たす。「帰国の物語」に対する第二世代の反応を理解するには，日本社会を生きる親の姿や学校や職場における自らの経験によって形成される側面だけでなく，家族で，あるいは単独で「帰国」した際の経験をもとにかれらが形成するブラジルのイメージの影響を考慮する必要がある。第二世代は「帰国」することで何を経験しているのか。そして，その経験がその後の自己認識，社会認識，将来展望にどのような影響をおよぼしているのか。こうしたトランスナショナルな観点に立つことで，第二世代が自らの実践をいかに創造していくかをより複合的に理解することが可能になるだろう。

Ⅳ．調査の概要

本稿では，2015 年 3 月から 2017 年 7 月にかけてブラジル系ニューカマー第二世代の若者 24 名（男性 9 名，女性 15 名）に対して実施した半構造化インタビューの結果をもとに分析・考察をおこなう（**付表**）。調査協力者は雪だるま式に増やしていき，インタビューは調査者が協力者の居住地（東京，神奈川，愛知，岐阜，兵庫，島根，沖縄）に赴いて実施した。所要時間は 1 人あたり 2 時間～5 時間であり，すべて日本語でおこなった。協力者の年齢は 19～31 歳で，日本生まれの 1 名を除く 23 名は小学校段階までに来日しており，うち学齢期前の来日は 17 名である。親の

来日経緯としては，いわゆる出稼ぎが 20 名，その他（スポーツ指導，布教）が 4 名であった。最終学歴は中卒 4 名，高校中退 1 名，高卒 6 名(うち 2 名はブラジルの高校)，専門学校卒 2 名，大学在学中 4 名（うち 1 名はブラジル通信制大学），大学中退 3 名（うち 1 名はブラジルの大学），大卒 3 名，大学院在学中 1 名となっている。現職は通訳・翻訳，英会話講師，旅行会社，アパレル関係，介護，ショップ店員など多岐にわたるが，複数言語の使用を要する職である場合が多い。工場労働に従事する者は 1 名のみであった。

対象者の「帰国」経験について概観しておくと，来日後, 1 回も「帰国」していない者は 4 名であり，残りの 20 名は 1〜5 回の「帰国」を経験していた。そのうち，高卒年齢以降にのみ「帰国」経験を有する者は 2 名に過ぎず，大部分は学齢期に 1 回から複数回の「帰国」を経験していた。

Ⅴ.「帰国の物語」の展開

本節では，まず，親によって語られる「帰国の物語」が，第二世代が成長する過程でどのような展開をみせたかを整理する。今回の調査からは，ブラジル系ニューカマー家族が来日当初携えていた「帰国の物語」のその後の展開には，実現，継続，転換という 3 通りのパターンがあることがわかった。以下，順に検討する。

1.「帰国の物語」の実現

まずは，家族揃ってのブラジルへの帰国というかたちで，「帰国の物語」が実現したパターンである。対象者のうち, B1 と B2 の家族がこのパターンに該当した。

B1 の両親は 1990 年に出稼ぎ目的で来日した。B1 は日本生まれである。来日後は家族で三重県の県営住宅に暮らし，父は自動車関係の工場で働き続け，母は工場で働いた後，姉（B1 のおば）と一緒に自宅で託児保育を始めた。託児保育は 3, 4 年続けたが，景気悪化による需要の減少でやめて以降は，内職をしていた。家族での帰国が決まったのは 2011 年, B1 が 17 歳のときだった。2008 年秋のリーマンショック以降の不況で周囲のブラジル人が次々と解雇されていくなか，なんとか踏みとどまっていた B1 の父にもついに解雇が言い渡された。次の仕事を探すことも考えたが, 21 年間でそれなりに貯金できたこともあり，家族での帰国を決めた。帰国後はその貯金を資金として牧場を購入し，現在は比較的余裕のある生活をしている。工場では 12 時間以上の労働があたりまえだった父に，再び日本へ渡る意思はない。

B2 は B1 の婚約者である。B2 の場合，両親が 4 歳の B2 と二人の姉を連れて来日したのは 1997 年だった。目的はやはり出稼ぎだった。来日後は父が工場で働き，母はたまにスーパーマーケットの総菜コーナーなどでアルバイトをするという生活だった。ただし，よりよい職場を求めて移動の多い生活であり, B2 の就学前に福岡県，長野県，愛知県，静岡県を転々とした後，小学校入学直前には再び福岡県に戻り，そこで 4 年ほど過ごした後には，広島県に転居することになった。広島には 7 年いたが，父がリーマンショック以降の不況で解雇されてしまう。その後は福岡県そして三重県と生活の場を移し，退職金でやりくりしていたが，それも尽きてしまったため，日系人離職者に対して政府が準備した帰国支援金の支給を受けて家族で帰国した。2010 年, B2 がちょうど 17 歳の誕生日を迎えた日であった。貯金もできず不本意な帰国ではあったが，幸いなことに両親は，親戚のつてで，開設されたばかりのパーティーサロンの管理人として雇われることになった。その後，両親はバーのオーナーになり，現在も忙しい毎日を送っている。

２.「帰国の物語」の継続

つぎは，日本での生活が長期化しているにもかかわらず，現在でもなお「帰国の物語」が継続しているパターンである。第一世代があきらかにブラジルへの帰国を志向している家族だけでなく，帰国か日本永住かに迷いや意見の食い違いがみられる家族も，いまだ帰国という選択肢を手放しているわけではないことを考慮すれば，対象者のうち 16 名（13 家族）がこのパターンに該当した。また，そのうち約半数の家族において，滞日年数が 20 年を超過していた。帰国志向でありながら日本での生活を続ける理由としては，親自身の職業上の困難に関するものと子どもの進路形成に関するものがあった。

（1）上昇移動をめぐる二重の困難

帰国志向でありながら日本に住み続けていることの一つの理由として，ブラジルにおいても日本においても上昇移動の可能性を見込めないがゆえの逡巡をあげることができる。とりわけ，日本での生活で仕事を重視し，子どもの教育には熱心とはいえない第一世代にこのような困難を抱えるケースが目立った。

B4 の両親が 11 歳の B4 と弟妹を連れて来日したのは 1996 年だった。ブラジルでは夫婦で旅行会社を営んでいたが，それをたたんで出稼ぎを選択したのだった。来日後は愛知県に居住し，両親とも工場労働を続けてきた。現在は，二人とも工場で夜勤勤務をしている。一方，子どもの学業に対する両親の関心は薄く，「おうちのなかで（勉強に向かわせてくれる）例がなかった」という。それでも B4 と弟はなんとか定時制高校を卒業したが，妹は定時制高校に入学したものの，中退してしまった。父親の現在の心境を B4 は「絶望」と表現する。ブラジルで大卒後，旅行会社を経営し，さらによい生活を求めて日本に来てはみたものの，思うように稼ぐことができないままに 20 年の歳月が経ち，いまや人生を「あきらめた」ように B4 には映る。日本で働くにしてもきつくて低賃金の工場労働以外に道を思い描けず，ブラジルに思いを残しながらも，新たな投資のための資金も気力も不足する現状のもと，働くことにあまり意味を見出せないまま，日本での生活を続けている。

B7 の両親は 1991 年に 3 歳の B7 と姉弟を連れて来日した。B7 が小 3 の頃まで岐阜県で過ごした後，愛知県に引っ越して現在にいたる。来日前，中卒の父はブラジルの日本企業で働き，小卒の母は布の販売をして生計を立てていた。経済状況の改善を求めて出稼ぎブームに乗って来日して以降，父は工場で働き続け，母はたまにアルバイトをすることもあったが，基本的には家にいた。現在，父は日本で自動車修理の仕事をしているが，ブラジル志向が強く来日を後悔していた母は，9 年ほど前に姉と弟を連れて帰国し，現在はブラジルで暮らしている。親の仕事が不安定で経済的に常に困窮した生活を送っていたこともあり，両親ともに子どもの教育には無関心だった。中学校の教師に B7 の高校進学を勧められた際にも関心を示すことはなく，B7 は進学を断念せざるをえなかった。結局，出稼ぎによる経済状況の改善という当初の計画は達成されることなく，父には長年，長時間労働を続けてきたことの疲れも目立ち，実際にブラジルへの帰国願望を口にすることもあるが，今となってはブラジルでの就職機会もほとんど見込めないため，日本において「働いて生き延びる」ことが，かろうじてとれる選択肢になっている。

B12 の両親はブラジルで経営していたビデオレンタル店が経営不振に陥ったため，2007 年に小 6 の B12 と弟を連れて出稼ぎ目的で来日した。父は高校，母は大学をそれぞれ卒業している。来日後は岐阜県に居住し，途中，リーマンショック後の失業をはさみながらも，現在まで工場労働

を続けている。子どもの教育については，日本語力の不足により学習内容などに具体的に踏み込むことはできなかったが，できる範囲の支援は積極的におこなった。B12 も弟も私立高校を卒業し，現在, B12 は公立，弟は私立の大学に通っている。また, B12 が高 2 で中国留学を経験できたのも，親の協力があってこそだった。帰国をめぐる両親の思いは「半々」である。親戚のいるブラジルで暮らしたいという気持ちが強くある一方で，政治情勢や安全面を考えると日本の方が過ごしやすいと感じている。より現実的には，高卒の父がいまのブラジルで満足のいく仕事を見つけるのは不可能に近く，他方，日本で働くにしても雇用が不安定であることが大きな不安材料であり続けている。いずれにしても，こうしたジレンマを抱えながら，さしあたり日本での生活を続けている。

（2）子どもの進学という目標

もう一つの理由は，子どもの進学を支えるために日本にいるというものである。この場合，目的およびその達成が見込まれる時期が比較的明確なことから，「帰国の物語」の説得力は相対的に高くなる。

B6 の両親は 1996 年，彼女が 1 歳半のときに来日して以降，愛知県で暮らしている。来日前，父は 20 歳で大工をしており，母は 18 歳で高校を卒業したばかりだった。来日後，父は派遣会社を通じてさまざまな職場を転々とした末, B6 が中学生の頃から現在にいたるまで正社員として溶接の仕事をしており，母は現在，部品工場でパートとして働いている。当初は 2, 3 年働いて帰国の予定だったが，「もうちょっといよう，もうちょっといよう」というかたちで先延ばしされ, B6 と弟が学校に通い始めてからは，学業途中での帰国は「かわいそう」との気持ちも働き，ますます「帰りづらく」なっていった。ただし，両親とも帰国の意思は維持しており，現在私立大学に通う B6（4 年生）と弟（1 年生）が卒業して安定するのを見届けたら帰国する予定でいる。

B15 の両親が来日したのは 1996 年，彼女が 2 歳のときだった。父は洗剤販売，母は病院事務をしていたが，先行して渡日した親戚の様子をみて自分たちもと出稼ぎを決めた。来日後は滋賀県に住み，父は途中 1 年半の失業をはさみながらも工場で働き続け，母は工場勤務の後，自宅での子ども向けポルトガル語教室の運営を経てブラジル人学校の教師になった。そして，現在はその学校の校長を務めている。来日前の生活がとくに困窮していたわけではなかったこともあり，当初は短期間滞在して帰国の予定であったが，結局その後, 20 年間日本で暮らし続けている。とくに父は高齢（70 歳）ということもあり，懇意にしている親戚の住むブラジルに戻りたいという気持ちをもっているが, B15 の妹が現在高 2 で大学進学を希望していること，また，いま連れて帰ったとしても，ポルトガル語が話せないために適応がむずかしいだろうとの判断から，まだしばらくは日本にいるつもりでいる。

B13 の場合，ブラジルで商売に行き詰まった父が出稼ぎ労働者として先行して来日した後，母と B13 を長姉とする三姉妹が合流した。1998 年, B13 が小 3 にあがる頃だった。14 年岐阜県で暮らした後，愛知県に引っ越しているが，両親は一貫して工場勤務であり，現在，父は弁当工場で監督者として，母は同じ工場で生産ラインの労働者として働いている。当初の動機は文字通り出稼ぎであったが，子どもが学齢期を過ごす頃には，日本の学校における教育内容の充実ぶりや，ブラジルでは深刻な社会問題である 10 代の若者のドラッグや妊娠についてほとんど心配なしで過ごせることから，子どもたちに日本で教育を受けさせることが働くことの最大の目的となっていった。ほとんど期待してなかった私立高校受験に関して親が背中を押してくれたことに, B13

自身が驚いたほどである。さらにその後, B13 は私立大学に進学し，卒業している。両親ともに最終的にはブラジルに帰国したいという願いを明確にもっているが，現在は，私立高校と私立大学に通う子どもたちが無事に進学・卒業し，工場労働ではない安定した職業に就くことを最大の「報酬」として，身を粉にして働いている。

３.「帰国の物語」の転換

当初は「帰国の物語」を生きていたが，さまざまな事情により家族での日本永住を志向するようになったケースもあった。両親がキリスト教の牧師であり，布教のために来日し，永住予定であるという B23 と B24 の兄妹を除けば, 4 名（3 家族）がこうした「帰国の物語」の転換というパターンに該当した。

兄妹である B20 と B21 の両親は, 1992 年, 8 歳と 4 歳になる子どもを連れて来日した。来日前, 父は肉屋，母はショッピングモールの従業員として働いていたが，先に出稼ぎ目的で日本に行っていた親戚に影響され，その後を追うかたちで来日した。来日後は親戚のいる岐阜県に居住し，父は一つの工場で現在まで働き続け，母は現在，パチンコ店の清掃のアルバイトをしている。B20 は高校卒業後，在学中からアルバイトをしていた居酒屋に就職し，現在は正社員として働いている。職場で出会った日本人女性と結婚し, 2 年前に一軒家を購入した。現在は 1 歳と 3 歳になる子どもの父である。妹の B21 は，中学卒業後，飲食店や工場での仕事を経て, 21 歳からは介護の仕事に携わっている。小 6 の息子を育てるシングルマザーであり，現在は, 1 年前に購入した一軒家に，両親，大学 1 年生の弟，自分と息子の 5 人で暮らしている。結局，近所に二軒の家を購入したことになる。家の購入にあたっては，両親と子どもたちで「家族会議」を開いた。日本で 20 年以上過ごすうちに，両親は，ブラジルに戻るのは親戚に会うための短期訪問で十分という気持ちになっていた。さらに，子どもたちの日本永住の意思を聞いた両親は，家族が一緒にいることの大切さを何よりも重要視した。結局，「みんな一致」で日本に暮らし続けることを決めたのだった。

上記の事例が親としての決断だったとすれば, B19 の親の事例は，パートナーとの関係による「帰国の物語」の転換と位置づけることができる。B19 の母は, B19 が 3 歳のときに前夫と離婚し, 1991 年，彼が 6 歳のときに, 1 年ほどの出稼ぎのつもりで，子守役の祖父母をともない 4 人で来日した。ブラジルでは音楽大学を卒業し，音楽教室でピアノやエレクトーンを教えていた。来日後は，木材加工会社の従業員，小中学校の巡回日本語指導員を経て，現在は専業主婦の身である。B19 が小 2 の頃，最初の職場で知り合った日本人男性と再婚したことで，短期の出稼ぎのはずだった母の計画は大きく変わり, 3 年経って祖父母が帰国した後も居続けることになった。来日した際には日本語がほとんど話せなかった母は，公文に 4 年間通って日本語を習得し，小中学校での指導員の職を得た。B19 が高校を卒業するまでその仕事を続け, B19 が大学在学中に，それまで生活していた岐阜県から滋賀県に引っ越した。そして現在，家族 3 人で滋賀県に暮らしている。継父はポルトガル語を解さないため，家庭はもっぱら日本語が話される「普通に日本の世界」である。外出してブラジル人と会う機会もめっきり減った。「郷に入っては郷に従え」という考えをもつ母ではあるが，ときとしてブラジルが無性に恋しくなることもある。しかしながら，再婚後の生活のなかで帰国はますます実現から遠ざかり，かつてブラジルに購入した家も「結局，住まないね」と判断し，すでに売却している。

Ⅵ.「帰国の物語」に対する第二世代の反応

第一世代が「帰国の物語」をめぐってさまざまな展開をみせている一方で，それに巻き込まれてきた第二世代は物語に対してどのような反応をみせているのだろうか。調査から浮かび上がってきたのは，物語の継承，否定，再編という 3 通りの反応である。以下，順にみていこう。

1．「帰国の物語」の継承

第一に，第二世代による「帰国の物語」の継承を挙げることができる。ただし，継承は，積極的になされる場合と消極的になされる場合があり，その分岐には親の出稼ぎに対する評価が密接にかかわっていた。すなわち，親の出稼ぎに正の効果が認められる場合，「帰国の物語」は，第二世代自身の出稼ぎをも正当化するものとして積極的に継承される傾向にあった。出稼ぎの正の効果は，たとえば，親が出稼ぎを終えて帰国し，ブラジルで首尾よく生活している姿をみることで実感されていた。他方，親の出稼ぎにほとんど負の効果しか認められないことに加えて，自らも日本での生きにくさを感じている場合，第二世代が日本で生活し続けることに積極的な意味を見出すことはむずかしくなり，「帰国の物語」は日本から脱出するための拠り所として消極的なかたちで継承される傾向にあった。

まずは，「帰国の物語」が積極的に継承される例をみてみよう。B1 が父の解雇をきっかけに家族での帰国を告げられたのは 17 歳，高 2 のときだった。突然で，しかも学業途中での帰国となることに猛反発し，一人で何とかすると説得しようともしたが，聞き入れてはもらえなかった。すでに高校を卒業していた兄も，帰りたくないという点では同様の状況だった。しかし，権威主義的な親のもとで「拒否権」はなく，日本に残るという選択肢はなかった。帰国後は外出する気も起こらず，家で泣いてばかりの日々を送った。だが，4 ヶ月経って現地の高校に編入するとすぐに状況は好転した。1 つ学年を下げての編入となったが，年齢差は関係なくすぐに友達ができ，編入当初の学習困難もかれらの助けで克服した。その後，4 年間学べ，居住するサンパウロ州より安く通えるという条件を満たすパラナ州の私立大学に進学し，服飾について学び始めた。ところが，1 年通ったところで母が鬱病を患い，実家に帰らざるを得なくなってしまった。その時点ですでに大学は退学したため，母が回復してからは，よりよい職業機会を求めてサンパウロ市に引っ越し，日本語力を活かせる日本企業に職を得た。職場の雰囲気もよく，翻訳を中心に 2 年間働いたのだが，都会なので治安が悪く，物価高で経済的にも苦しかったため，気持ちが日本へと向くようになった。ブラジルで家を買いたいという希望が，ブラジルにいてはかなわないと思ったからである。そこで，親が出稼ぎで得た資金で牧場を購入したことを見習い，「親みたいに出稼ぎみたいな感じで（日本へ）行こうかな」と考えて，婚約者の B2 と一緒に日本へ向かった。来日後は島根県に居住し，派遣会社に紹介された工場で事務の仕事をした。1 ヶ月ほど働いたところで，同じ派遣会社から，外国にルーツをもつ子どもの教育支援をおこなう NPO が通訳・翻訳の仕事ができる人を探しているという話を聞き，転職を決めた。現在は「多文化サポーター」として，ブラジル人が在籍する市内の小中学校に入り，翻訳・通訳に携わっている。

B2 も B1 と同様，不本意な帰国を経験している。不況で父が解雇されたのをきっかけに，それまで住んでいた広島県から福岡県へ居を移すことになったが，引っ越しがおこなわれたのは，奇しくも B2 が入るはずだった高校の入学式当日だった。つまり B2 は，合格していた高校に新入生として一歩も足を踏み入れることなく中退することになったのである。中学生のときは，暴走族とかかわったり，年間 200 日以上も欠席したりと「ちょっと不良に」なっていたことを反省し，高

校で自らを立て直そうとしていた矢先の引っ越しだった。そのため再び「ぐれ」てしまい，引っ越し先で転入学試験を受ける意欲も失いアルバイト生活に入った。その後，日本を離れるまでに福岡県に 3 ヶ月いた後，三重県に移って 1 年半過ごすことになるが，三重県でのアルバイトはその後の将来展望に影響をおよぼすものとなった。職場は大手スーパーの農産部門であり，地元農家との連絡や入荷作業を任された。社員教育も充実し，信頼できる上司にも認められ，「仕事のやりがいを覚えた」という。そして何より，農家の人びととの接触を通じて農業の魅力を感じるようになった。帰国後は，母が「勝手に」見つけてきたシュラスコ店で 2 年間働いてポルトガル語を身につけた後，日系団体に職を見つけ，正職員として資料館の受付や翻訳の仕事に携わった。学ぶところも多かったが，給料が低く，暇な時間も多いためやりがいをなくし, 1 年半で退職した。そして次に選択したのは給料が「断然いい」日本企業であった。だが，その当時 B2 は，二つの理由で日本行きを検討するようになっていた。一つは，子どもの頃から患っている糖尿病の治療代に関する不安であり，もう一つは，親から自立して将来を築くための土台をつくりたいという願望である。こうした二つの気持ちが重なって，日本への出稼ぎを決意した。当時の職場で出会った B1 も，それに同意してくれた。そこで, 1 年半働いた日本企業をやめて日本へ向かったのである。B2 が描く将来の夢は，B 23 の家族が所有する牧場の近くに土地を購入し，自らは農業をしながら，互いに連携した経営を展開することである。現在は島根県に居住し，工場で働いているが，お金だけでなく将来に活かせる知識をできるだけ多く蓄えるためにも，より幅広い能力が必要とされる職場への転職を検討しているところである。

つぎに，「帰国の物語」の消極的な継承の例をみてみよう。B4 は, 11 歳で来日して小学 5 年生に編入し，中学校に進学した。しかし，学校でも家庭でも学習支援はほとんど得られず，学習意欲をもてない状態で登校意欲もなくし，中学 3 年生では欠席日数が 190 日以上にものぼった。両親共稼ぎのため，放課後は妹と弟の面倒と家事を任され，部活動もしていない。高校進学の道はほぼ閉ざされた状態だったが，中学校の日本語教室でボランティアをしていた大学院生の助力により，夜間定時制高校への進学を果たし，無事に卒業した。学力的，経済的な理由から大学進学はあきらめたが，帰国して大学進学を果たした中学時代の同級生に刺激され，コールセンター等で働く傍ら，ブラジル人が経営する英語学校に通い，オーストラリアへの語学留学も経験した。その後，子ども向けの英語教室に職を得て現在も講師として働いている。B4 は，出稼ぎで来日した「多くのブラジル人」について，お金を稼ぐことだけに目が向き，「いまのその人生をちゃんと生きていない」と批判的に語る。そうした「多くのブラジル人」のうちに自らの親も含めてとらえており，それを「悪い例」と表現する。そうした「悪い例」を反面教師としながら, B4 は英語の勉強に向かっていったのである。その意味で B4 は，多くの第一世代と異なり，第二世代には日本にいて「ほかにいろいろできることがある」と感じているのだが，そのことが即，永住希望にむすびついているわけではない。一つには，学校や職場など社会生活のさまざまな場面で，異なるものや変化を嫌う日本社会の閉鎖性に違和感を抱くことが多いという自らの経験によるところもあるが，それだけでなく，日本では年をとることに肯定的なイメージを描けないということも関係している。安定せず「絶望」すら感じる両親の姿をみるにつけ, B4 は，日本にいても「50 代とか，あんまり楽しいことがないかな」と感じてしまう。「日本では，もうこれから病気になるだけで，何かちょっとさびしいイメージがある」と言い，「もうちょっと元気な生き方をしたいな」と希望を述べる。対象国としてスペインをイメージしたりもするが，「でも，実際そこに

住んでみたら，『あ，イメージとちがった』となるかもしれないから，やっぱりブラジルに戻ると思う」と将来の「帰国」を想像している。

２.「帰国の物語」の否定

第二世代がみせるもう一つの反応は「帰国の物語」の否定である。ただし，それを第一世代における「帰国の物語」の展開と関連づけてみた場合，否定にいたる 2 通りのあり方が浮かびあがった。一つは，第一世代が「帰国の物語」を継続しているにもかかわらず，第二世代はそれを否定するというあり方であり，もう一つは，第一世代も第二世代もともに「帰国の物語」を否定するというあり方である。順にみていこう。

B7 にとって，親の出稼ぎ労働は，つねになにかを断念する経験と結びついていた。親が職場を変えるたびに転校を強いられたことで，学力は定着せず，継続的な友人関係を築くことはできなかった。また，経済的に不安定な生活が続いたため，教師の熱心な勧めがあったにもかかわらず高校進学をあきらめざるをえなかった。こうした状況が子どもにおよぼす影響を十分に理解しない親の無関心について，B7 は，親自身の低学歴と仕事一辺倒の生活ゆえに「仕方ない」と考えている。そして，そうした親の生き方と自らの生き方を明確に差異化して語る。高校進学を断念した B7 ではあったが，学習意欲を失ったわけではなかった。中卒と同時に工場労働に従事する一方で，就学の機会をうかがっていた。そして，その機会は思わぬところからやってきた。19 歳でシングルマザーになり，母の援助を得るために父を残してブラジルに行くことになったのである。もともと帰国願望の強かった母は，姉と弟を連れて子どもが生後 1 ヶ月になる頃に帰国していた。B7 は，ブラジルで大学を卒業して日本へ戻ることを目標に，日本企業で通訳秘書として働きながら，高校卒業資格の取得に向けてスプレチーボ（補習課程）に通いはじめた。だが，給料は満足のゆくものではなく，スプレチーボの学習環境にも失望するばかりであった。路上で強盗の被害にも遭った。こうした経済的・文化的・社会的現実を目の当たりにして，ブラジルには「住めない」と判断し，2 年滞在した後，当初の予定を大幅に早めて再び日本へ戻ってきた。以降，4 年の工場勤務，区役所での通訳職，6 ヶ月のブラジル滞在を経た後，日本での生活に見通しがつくまでということで，子どもは母に預けてきた。その後，再び工場労働に従事して 4 年経過した頃，友人から区役所での通訳職を紹介されたので転職した。1 年経ってようやく落ち着いてきた頃，母親に預けていた子どもが姿をくらましていた男性（子どもの父親）に連れ去られるという事件が生じる。子どもを取り戻すための裁判が必要となったため，仕事はすべてやめてブラジルへ渡った（裁判は継続中）。6 ヶ月のブラジル滞在を終えて再び日本に戻ってからは，主にブラジルを扱う旅行会社に職を得た。給料はよいとは言えないが，幅広く学べるこの職場が「めっちゃ好き」で，現在まで働いている。紆余曲折ある人生を歩んできて B7 がいま感じるのは，目先の稼ぎよりも，なにかを学べる仕事が将来を拓いてくれるということである。そして，日本という場を，「働いて，学んで，それで進んでなにかをしてみたい」という願望に応えてくれる場ととらえている。「働いて生き延びる」ことで精一杯の第一世代と「うちらの世代は違う」と B7 が言うとき，「帰国の物語」にとらわれて身動きできずにいる第一世代と異なる自らの立ち位置をはっきりと宣言しているのである。実際，B7 の夢は，自分と同様に，一つの文化の枠に「あてはまらない」子どもが可能性を伸ばせる教育施設をつくることである。そして，そうした支援の取り組みについて，「（外国人が集住する）コミュニティに関してのことなんで，かならず近くに住むというのが私の目的だと思う。離れられない」と，定住の意思を明確に語っている。

他方，第二世代による「帰国の物語」の否定が第一世代のそれと共振するかたちで生じる場合がある。B20 は 8 歳のときに親に連れられて来日し，小 2 から高校を卒業するまで日本の学校に通った。自分は「日本人」だと思い，日本語教室への取り出しが嫌で必死に日本語を勉強し，小 5 からは原学級のみで，ほぼ日本人に囲まれた生活を送った。高校卒業をひかえて，家族で帰国するという話が持ちあがったため，ブラジルでの大学進学を考えて日本で大学は受験しなかった。ところが，妹の妊娠が発覚したため，帰国は急遽取りやめになり，B20 は高校のときからアルバイトをしていた居酒屋で正社員として働くことになり，途中で何度か出入りがありながらも現在にいたる。ブラジルを訪問した際やネットでのつながりにおいても「家族愛」で包んでくれる親戚に人間的な魅力を感じ，いまでは自らを積極的に「日系ブラジル人」と称しもするが，ブラジルとのつながりの「濃さ」については親子間で大きな開きがあると感じている。土地への思い入れの強さという点では，居住期間のちがいを反映して，親はブラジル，自分は日本への志向が強い。職場で出会った日本人女性と結婚し，子どもが生まれることで，日本での生活はより具体性を帯びるものとなった。とりわけ，長女が 1 歳のときに一軒家を購入したことは，永住志向の結果であるだけでなく，地域に根を張る出発点としても大きな意味をもっていた。一軒家で暮らしはじめて近所づきあいができるようになったことを B20 は喜ばしく感じている。B20 が働いている居酒屋に近所の人びとが来てくれるおかげで，つながりが広がり，深まっていく。また，一軒家に暮らしはじめて自治会に加わったことで，地元の動きがよくみえるようになり，「貢献」したいという気持ちをもてるようにもなった。そして，子どもたちの永住意思の表明を聞いた両親は，ブラジルに思いを残しながらも，家族が一緒にいることを最優先し，自らも近所に一軒家を購入したのであった。

３.「帰国の物語」の再編

第二世代が示す反応の別のありようとして「帰国の物語」の再編があげられる。これは，親が継続して有する「帰国の物語」を，第二世代が固有に獲得した資源や経験を踏まえて新たな移動の物語として編み直すケースであり，トランスナショナルな志向を示す傾向にあった。

B14 の両親が B14 を連れて出稼ぎ目的で来日したのは 1992 年，彼女が 2 歳のときだった。小 2 まで兵庫県の学校に通ったが，貯金が十分にできたという親の判断により帰国することになった。帰国後は私立学校に編入し，中学校を卒業する頃には仲のよい同級生との高校進学を予定し，大学を卒業して就職活動をしている自分の姿を思い描いたりもしていた。ところがちょうどその頃，再び家族で日本へ出稼ぎに行くという話になり，「自分でいろいろ，次こうしようとかを決めてたやつが，突然反対方向を向いちゃったみたいな感じ」がして自分のなかでの整理がつかず，親と頻繁に衝突したが，結局，中学校を卒業後，家族で日本へ向かうことになった。日本に行くのが不可避ならば日本の高校に通って日本語を習得し，大学にも進学したいと考えていたが，日本には長く滞在せずにできるだけ早く帰国するという親の意向により，ブラジル人学校に通うことになった。しかし，その学校の高等部に 6 ヶ月ほど通ったところで，親の仕事の都合により転居することになり，別のブラジル人学校に入り直した。その学校で高 1 から卒業まで過ごした後は，日本の大学に入ろうとも考えたが，学びたい内容が学べること，日本で資格取得すれば帰国後の就職に有利なこと，学習してきた日本語を活かせることなどを勘案して，服飾系の専門学校に進学した。じつは B14 は，高 3 の時点で親から，卒業後は短期間集中して働いて帰国するか，もしくは日本で勉強して働くかの選択を迫られていた。工場労働でいつも疲れて不満そうな親の姿を

見ていた B14 は，工場でだけは働きたくないと思い，日本での進学という「面倒くさいほう」を選択する。そのためには十分な日本語能力が必要となるが，ブラジル人学校の日本語指導だけでは不十分だったため，放課後には公文に通い，高卒後 1 年間の間には日本語能力試験の 2 級に合格した。専門学校を卒業した後は，学校で身につけた縫製およびデザインの技術と英語力が買われてアパレル関連企業に正社員として採用され，資材発注などの仕事に携わった。だが，不況により給料の未払いが生じたため，別のアパレル関連企業に転職したところである。この場合も，服飾の知識のほかに英語とスペイン語の能力を買われての採用であった。現在は販売員兼マネージャー候補として職場でも期待されている。英語にしてもスペイン語にしても，ブラジルにいる頃から学校で基礎を学んでいるだけで，特別な教育機関等に通った経験はない。職場での必要に迫られて，英語を必死で勉強しているのが現状である。

このような，必要なことは移動先で学び，身につけるという態度は，幼い頃からの頻繁な移動経験のなかで身についた適応力であることを，B14 自身は明確に自覚している。現在も職場の期待に応えるべく言語能力を日々磨くことに余念がないが，これは B14 にとって，社員としての責任を果たすということ以上に，今後も生じうる移動に備える，あるいは，よりよいかたちでの移動を実現するために，移動への適応力をより強化する実践でもある。実際，現在の職場は好きでやりがいを感じてもおり，英語能力を磨いたり日本語の敬語表現を習得するにはよい環境にあるが，そこで働き続けるつもりはない。目標は独立して自分なりの事業を展開することであり，現在はそのための知識を得るための準備期間と考え，5 年間は働く予定でいる。独立後の事業内容についてはまだ模索中であるが，経験上，洋服関係の仕事は収益率が低いと感じているため，それ以外のものを考えている。具体的な事業内容はともかく，B14 が重視するのは，独立して場所の縛りなく働ける環境に身をおくことである。親の「帰国の物語」に翻弄される身であることを恨んだこともあるが，移動先の日本で学びたいことを学び，就きたい仕事に就けているという手応えを感じられる現在，「自分の方向性に関しては，こっちに来てすごくよかった」と，再来日に対して「逆に感謝している」と語っている。

出稼ぎ目的の親に連れられて小 3 で来日した B13 にとって，中学校までの学校生活はきわめてきびしいものであった。小学校からはじまったいじめは中学校に進学した後も続き，B13 を孤立させ，学習意欲を奪っていった。そうした学校でのつらい思いを唯一忘れさせてくれたのが英語だった。英語との出会いは，B13 が 12 歳のとき，両親が通いはじめた英会話教室に一緒に通うようになったのがきっかけだった。中学校で仲間はずれにされて一緒に遊ぶ友達もいなかった B13 は，学校が終われば帰宅し，唯一楽しさを感じることのできる英語の勉強に打ち込んだ。他教科の成績は低く，高校進学も半ばあきらめていたが，その期間に培った英語力が受験に大きな効果を発揮し，私立高校そして私立大学への進学を果たすことができた。そして現在，一層磨かれた英語力を活かして通訳職に携わっている。B13 にとってブラジルは大好きな親戚に迎え入れてもらえる場所である。その意味で，「私の故郷というふうに，すごく愛しく思っている」が，他方，ブラジル育ちで「生粋のブラジル人」である親と比較すれば，自分にとってブラジルは「あまり知らない国」であるとも感じる。日本で成長してきたがゆえに「日本人として考える」自分がいることも自覚し，状況に応じてブラジル人と日本人を切り替える自身のありようを「二重人格」と表現している。だからといって，B13 が自らの将来の居住地について，ブラジルか日本かの二者択一の問題としてとらえているわけではない。

B13　何か一つのところにそんなに（いたくない）。（日本には）もう長くいすぎたから，違うところに行きたいなという気持ちもあって。

――　でも，B13 さんの場合は，それができることがありますもんね。

B13　そうなんですよ。だから，英語ができるから違うところへ行っても英語を教えたりとか，日本語を教えたりとかできるし。

ブラジルにある日本企業で働いて両国の架け橋をしたいという思いがある一方で，治安などの条件を考慮してより過ごしやすく，ブラジルにも比較的近いカナダへの移住も検討している。じつはB13は現在，自らも信仰するプロテスタント教会の仲間を通じて知り合ったトーゴ共和国出身の男性と結婚している。夫は教会系列の私立小中学校の英語教師をしているが，近々牧師になる予定であり，牧師として他国で働く機会があれば，ぜひそうしたいと夫婦とも考えている。教会のネットワークは世界各国に広がっており，教会で働くかぎり生活にさほど心配はいらないため，対象はカナダにかぎられるわけでもない。「長くいすぎた」という日本を離れて向かう先は，かならずしもブラジルではなく，英語力と教会ネットワークを活用できる複数国に開かれているのである。ここにわれわれは，帰国か定住かという「帰国の物語」に付随する枠組みを超えて，移動自体をライフスタイルとするような自らの物語の生成へと向かう第二世代の姿をうかがうことができる。

Ⅶ．第二世代の「帰国」経験

これまで，第一世代が子どもに示す「帰国の物語」とその展開が，労働や居住をめぐる第二世代の選択にいかなる影響をおよぼすかをみてきた。そこでは，第一世代の「帰国の物語」に対する第二世代の反応を，主に第一世代の出稼ぎ労働に対する第二世代の評価という観点から検討した。

しかしながら，第一世代の「帰国の物語」に対する第二世代の反応は，単に出稼ぎの評価だけでなく，かれら自身がブラジルに対してどのようなイメージを形成するかによっても異なってくる。そしてそのイメージは，親の話やメディアを通じて間接的に形成される場合もあるが，実際のブラジル訪問を通じて具体的に形成される場合も少なくない。今回の調査でも，来日後，一度もブラジルを訪れたことがないという対象者は 24 名中 4 名であり，残りの 20 名は現在にいたるまでに 1 回から複数回の「帰国」を経験していた。第一世代が出稼ぎを繰り返すことによりこうした「帰国」が生じる場合もあるが，出稼ぎの最中であっても親族訪問などの理由で短期の「帰国」がなされる場合もある。

重要なのは，第二世代にとっての「帰国」経験は，滞在期間の長短にかかわらず，ブラジルに対するイメージ形成にさまざまな影響をおよぼすということである。そして，こうしたイメージ形成が帰属意識の大きな変化をもたらし，第一世代の「帰国の物語」に対する第二世代の反応に大きな影響をおよぼすこともある。今回の調査で，第二世代に特徴的な「帰国」の語りとして浮かびあがったのは，観光としての「帰国」と転機としての「帰国」の二通りの語りであった。

１．観光としての「帰国」

「帰国」の理由として多くあげられたのが親族訪問であり，対象者の約半数が言及していた。ブラジル在住の親族の病気や死がきっかけになる場合もあれば，とくに大きな出来事がなくとも，

長く会っていないことを理由に訪れる場合もあった。親族訪問のための「帰国」は，数週間から数ヶ月という比較的短期の滞在としてなされることが多く，また，同一家族において繰り返される傾向が見られた。「帰国」の理由として，他にも自身を含めた家族の病気治療や親の自動車免許取得・更新などがあげられたが，これらも親族訪問の一環としてとらえることができるだろう。親についていく未成年の第二世代にとって，親族訪問は，しばしば「遊びに」ということばで説明されるように，ある種の気やすさとともに経験される傾向にあった。

たとえば B24 は，1991 年，1 歳のときに親に連れられて来日し，小学校から専門学校を卒業するまで日本の学校に通った。専門学校卒業後は工場労働や市役所での通訳職を経て，現在は契約社員として期間従業員の委託管理の仕事に携わっている。来日して現在にいたるまで, 5 歳, 9 歳, 12 歳, 20 歳, 21 歳と 5 回の「帰国」を経験している。親に連れられての「帰国」であり, 12 歳のときの 4 ヶ月をのぞけば，すべて 1 ヶ月程度の滞在であった。「帰国」すれば，父方の親戚が住むサンパウロ州と母方の親戚が住むゴイアス州の両方を訪問する。ブラジルへ行くたびに B24 が強く感じるのが，ブラジル人の「明るさ」や「人間に対しての愛」である。

ブラジルへ行って，大都会ってみんな冷たいイメージがあるじゃないですか。ブラジルのサンパウロにいても人に話しかけられるし，銀行の順番でも前の人，後ろの人から話しかけられるし。そういうのを見ると，ずっと日本に住んでいる私からはびっくりというのがあって，やっぱりブラジル人って明るいんだという。駅でも誰もほっておかないというか，知らんぷりをしないというのがブラジル人なので，物を落としたら，みんなから「落ちたよ」といろんな人に言われたり，誰かが気分が悪くなると，どやっとみんな手伝いに来たりというのがあって。

そのような光景を目にして「自分もそういうところはもっとブラジル人らしくしなきゃいけないかな」と思う一方で，ブラジルに 1 ヶ月も滞在すれば「飽きてくる」とも語る。サンパウロの都会で買い物をする楽しさも，物価高のためそう長くは続かず，治安がよいため夜間の外出も自由にできる住み慣れた日本を便利に感じはじめる。B24 にとってブラジル行きはあくまでも「旅行」であり，滞在中は自らを「観光客みたい」に感じ，残りたいと思ったことは「1 回もない」と断言する。「日本に帰ってくると，ここがホームという感じ」がすると言い，「ブラジル人のままでありたい」という思いを同時に抱きながら日本で暮らし続けることを望んでいる。

その一方で，ブラジルへの「帰国」をより主体的に実践しようとするケースもある。とりわけ成人期以降の「帰国」には，ブラジルの現状を積極的に知ろうとする自発的な契機が含まれていることが多い。

たとえば B15 は，出稼ぎ目的の親に連れられて 2 歳のときに来日して以降，高校まで公立学校に通った後，家計の苦しさを奨学金やアルバイトで補いながら私立大学に進学し，現在は国立大学の大学院で教育学を学んでいる。現在にいたるまでに, 4 歳, 5 歳，小学 5 年生，中学 2 年生，大学 1 年生と 5 回の「帰国」を経験した。4 歳と 5 歳のときは親と一緒で，それぞれ 6 ヶ月と 3 ヶ月の滞在であった。小学 5 年生以降は，親の同行はなく，小学 5 年生では兄と，中学 2 年生では妹と一緒に飛行機に乗ってブラジルに 3 ヶ月，そして大学 1 年生では単身で向かい 1 ヶ月ほど滞在した。「帰国」の際にはいつも，サンパウロ州に居住する父方の親戚と母方の親戚を「半々」訪問して過ごした。小学 5 年生での「帰国」は，学校でいじめを受けてブラジル人であることに消極的になっていた B15 を「ポジティブに」してくれたという点で印象に残っている。現地の人び

ととのかかわりを通じてブラジル人の魅力を実感し，自らのルーツ，名前，外見，ポルトガル語に「誇り」をもてるようになったのである。ただし，基本的に中学 2 年生までの「帰国」は，親戚による歓待を享受するという側面が強く，「旅行みたいな感じ」であり続けた。B15 がはじめて自費による「帰国」を実行したのは，大学 1 年生のときである。大学で国際関係を学びはじめたこともあり，それまでとは異なるブラジルへの興味もあった。だが，到着するやいなや B15 が直面したのは，強盗，殺人，ドラッグなどの社会問題が身近に存在している現状であり，結局得たのは「住めない」という実感であった。現在も基本的にその思いは変わらないが，訪問自体をあきらめたわけではない。むしろ，より長く滞在することで，親族訪問以外にも行動や経験の幅を広げたいというのが現在の希望である。

1, 2年ぐらい（ブラジルに）住んでみたいなとは思いますね。何かまとまった時間がないとできないようなことって，たぶんたくさんあると思うので。とくに旅行とか。いつも親戚めぐりで終わっちゃうので，そういう意味では，もうちょっと長期でいたら，ブラジルで行ったことがないようなところにも行けるのかなって思いますね。日本で出会った友達とかも，やっぱりすごいブラジルのところで点在しているので，なかなか親戚めぐりだけしていると余裕がなくて会えないので。

２．転機としての「帰国」―問い直される帰属

つぎに検討するのは，「帰国」経験を通じて形成されるブラジルのイメージが，第二世代の帰属意識に大きな変化をもたらし，第一世代の「帰国の物語」に対する反応に影響をおよぼすケースである。対象者の語りにおいて，そのような帰結をもたらす「帰国」は，人生の転機としてとくに熱を帯びて語られる傾向にあった。

（1）帰属集団としてのブラジル人の肯定

「帰国」後の経験がブラジル人に対する肯定の感情をもたらし，ブラジルへの帰属意識を高めることがある。そうした感情の変化は，先述したＢ15 のように，ブラジル在住の親戚や知人との交流を通じて生じる場合もあるが，ともに「帰国」した第一世代の，日本にいるときとは異なる姿を目にすることによって生じることもある。ホスト社会において子ども（とくに娘）の行動に対する親の統制がきびしくなる傾向があることが，移民第二世代に関する先行研究において指摘されているが（たとえば, Wolf 2002），本研究の対象者のなかにもそうした親子関係を経験した者がいた。具体的に言えば，放課後の外出をきびしく制限されることで，子どもが親に対する不満を募らせるというようなケースであるが，家族での「帰国」は，日本でのきびしい親の姿とは異なる姿を目にすることで，親に対する見方を新たにし，ひいてはブラジル人への肯定的な感情を強化する機会となっていた。それは同時に，親の姿の変化を通じて日本社会のありようを相対化する契機でもあった。

たとえば B1 の場合，母親から放課後の外出を禁止され，遊び相手として唯一許されていたのは兄といとこだった。一時，母親が託児保育をしていた頃には，その手伝いを求められたこともある。その他，携帯電話のメールをチェックされるといったこともあり，行動が制限されることに不満を募らせていた。だが，彼女にとって親は「こわい」存在であり，反抗はありえなかったという。父親の解雇により高 2 での「帰国」が決まったときには，せめて卒業までは，との訴え

にまるで聞く耳をもたぬ親を恨みもした。しかし，「帰国」した後の母親からは，日本で見せていたきびしさが消え，新たに現れたのは，くつろいだ「ゆるい」姿であった。

一言でまとめると，（日本にいるときは）うざかったです，お母さん。本当に嫌でしたね。何でこんなにきびしいんだろう，何もしちゃいけないしって。遊びに行くことすら行かせてくれなくて。でも，ブラジルに行ってからは，「遊びに行ってきていい？」って聞けば，「行けば」って感じになってくれて，すごい，いいお母さんになりましたね。たぶん，日本にいたときは，知らない人がまわりにいて心配とかだと思います。

それ以降，彼女にとって母親は，「こわい」親から，生きにくい日本で子どものために最善を尽くしてくれた「尊敬」すべき親となり，一番の相談相手になっていった。

「帰国」後に変化した母の姿，そして，編入後の慣れない学校生活をそばで支えてくれた同級生の姿に，B1 は日本人にはない「温かいオーラ」を見いだし，ブラジルの魅力を一層感じるようになった。そして現在は，「ほしいものを簡単に買えたりする」日本より，他者と楽しい時間を過ごすことを重視するブラジルでの「毎週のバーベキューをとりたいな」と思っている。

（2）帰属集団としてのブラジル人の否定

上記の例とは逆に，「帰国」した際に，現地の人びととの間に文化的な摩擦が生じることで，ブラジルに対する否定的な感情が引き起こされ，帰属意識の喪失という事態に陥ることもある。

6 歳のときに親に連れられて来日した B19 は，その後，小学校から中学校にかけてのいじめと中学 1 年生終わりから半年ほどの不登校を経験しながらも，小学校から塾に通って高い学力を身につけたことにより，有名私立大学への進学を果たした。B19 を勉強に駆り立てた最大の要因は，息子の大学卒業を何よりも願う母の期待であった。母はよく自らの家系を自慢していたという。母の男兄弟二人は医師であり，祖父は早稲田大学，そして祖父の兄弟は慶應義塾大学を卒業したという話を繰り返し聞かされた。また，母自身もブラジルの音楽大学を首席で入学・卒業していた。そうしたことから，息子に大学に行かせることが母の夢であり，口には出さなくても「勉強できなきゃだめだよというプレッシャー」を感じ続けてきたという。

そうした重圧のもと，大学進学を果たすことで，母の期待に応えたかにみえた。だが，大学生活がはじまってみると，進学先が理系だったこともあり，勉強についていくのは容易ではなかった。「なんとか食らいついた」が思うような成績はとれず，そのことが，多額の奨学金の支給を受けていることへの焦りとなって大学 2 年生の頃から次第に追い詰められ，とうとう，鬱病になってしまった。それでも，母の夢をかなえようと必死にがんばり，2 年間留年したが事態は思うように進展せず，悩んだ末，中退を選んだ。

鬱病になった B19 は，療養のため大学を休学してブラジルへ渡った。小学 4 年生と 5 年生のときに，親族訪問のため短期滞在して以来のブラジルであった。在伯中はサンパウロ州の親戚宅で 1 年間過ごしたが，その間に生じた現地の人びととの交流が，ブラジルに対する B19 のイメージを決定づけた。鬱病は日本居住が原因との断定や繰り返されるパーティーに辟易した。一方的な日本批判を聞かされると，日本の肩をもちたくなった。

ブラジルに療養に 1 年間行ったときに，「日本にいるからそういう病気になっちゃうんだよ」

とかってすごい言われたんで。たぶん，その点はあながち間違ってはないんだろうけども，でも，それをすごい決めつけてくるのがすごい嫌だった。で，パーティーが毎週毎週あるでしょう。毎週毎週あるけど，そんなパーティーとか毎週毎週行きたくないし。

「ブラジルいい国だよ」って言って，「日本はせかせかしててすごい心が疲れるから，ブラジルに帰ってきなよ」ってすごい言ってくるけど，「日本のこと知らないでしょう？」って思っちゃうんです。だって，「そもそもブラジルにいたら，好きな車乗れないじゃん，オープンカー乗れないやん」って思ってしまうのよ。その時点でぼくの候補からはずれるから，みたいな。

こうした経験から, B19には，ブラジル人は「押しつけがましい人」というイメージが強く形成され，「ブラジルの人間関係がすごい嫌い」と感じるようになった。そう感じるのは自分が「日本に長くいすぎたから」とも自覚しており，ブラジル人ではあるが，「名前がカタカナなだけ」でサッカーもポルトガル語もできず，「ほぼ日本人と一緒」と感じている。そして，「今の自分の性格にはこの国（＝日本）が合っている」ことから，「家を建てるなら日本」と考え，紆余曲折してたどり着いたカメラマンの仕事を軌道に乗せようと奮闘しているところである。

（3）帰属集団の不在の発見

「帰国」経験を通じて，ブラジル人の枠にも日本人の枠にも入りきらない自らの存在のありようを認識し，新たな帰属集団の形成に向けて動きだそうとするケースもある。

B7 は, 19 歳のシングルマザーとして，ブラジル在住の母の援助を得るために「帰国」し，働きながら大学進学をめざしたが，経済的にも文化的にも社会的にも，ブラジルを自らの居場所と考えることができなかった。

経済的にもそうだったんだけど，いくらいても，ここは住みたいと思わないっていうのがきた。ちょっと鬱も入ったんだよ。慣れない。文化に慣れなかったし，うちの場合は，目の前で人が刺されて，すごい怖かった。安全な場所が好き。自由に歩きたい，自由にあれこれしたいっていうのもあるし。やっぱり，おうちって感じがするのがやっぱり日本だから，うちの場合は。

結局，ブラジルには「住めない」と判断し，予定より早く日本へ戻ってきたわけだが, B7 はブラジル滞在をけっして悔いてはいない。逆に，その経験こそがものの見方を大きく変え，その後の道筋を照らしてくれたことを強調する。すなわち，ブラジルに滞在する経験を通じてはじめて，自らがいかなる状況のもとで社会化されてきたかを再認識し，めざすべき目標が明確になったと語るのである。

ブラジルに１回も行かないでずっと日本におったら，今の考え方なかったと思う。やっぱりほかの文化見るのは大事。（中略）ブラジル行って，「ああ，こうなんだ」って見て，自分が本当に何をしたいか，どういうのが私に合ってるかっていうの，やっとわかってきたから。どんだけ私たちが文化に結ばれてるかっていうのがやっと見える。ほかの文化を見ると，どんだけ自分がその文化にあてはまるか，あてはまらないかっていうの，やっぱり見えてくると思うんだよね。

ここで B7 は，幼少期から日本で育ち，その中でさまざまなものを身につけてきたという事実をあらためて発見している。では，そのことは，B7 が「日本文化」に同化していることを確認したということなのだろうか。以下の語りからすれば，そうした推測は妥当とは言えまい。

うちらの場合は，やっぱ文化におさまってないから，一つの文化だけに。結構，日本で育ったんだけどブラジル人。だで，私日本人って感じがしない。でも，ブラジル行くと，ブラジルで育ってないから，ブラジル人の文化も頭に入ってない。ちょっと別次元におるみたいな感じなんだよね。それで，たぶん，なんでも頭には簡単には入りやすいし，わかりやすくはなると思う。

B7 は，既存の文化の枠組みにあてはまらない「別次元」を生きる存在と自らをみなす。そして，そのような自己のありようを同様の境遇を生きる子どもたちに重ね合わせ，文化的に「別次元」に生きることを積極的に評価し，「日本文化」にも「ブラジル文化」にも同化しえないことの可能性を最大限，育めるような教育施設をつくりたいと考えている。

（私たちみたいな子どもは）文化にあてはまらないんだわ。たとえば，日本じゃ自分の文化につながっとる。ブラジル人は自分の文化につながってる。これ，日本で育ってる子っていうのは文化がないんだわ。両方の文化が入って，頭がすごい幅が大きいんだわ。いろいろ簡単に聞き取れる。そこがすごくいいと思う。（中略）一つの文化につながらない。いろんな文化が入っても，それを受けやすくなるような人になるもんで，頭がすごいもう，本当に世界にまわってるみたいな感じ。言い方が合ってるかどうかはよくわかんないんですけど。私が好きなのはそこなんだわ。そういう子どもをつくっていきたいんだ。

Ⅷ．まとめと考察

本稿では，ブラジル系ニューカマー第二世代の「帰国」をめぐる経験について，世代間の経験の相違および自身の「帰国」経験に対する意味付与に注目して検討してきた。以下では，本稿の知見を整理し，その含意について論じていく，

これまでの議論から得られた知見は大きく 3 点に整理できる。第一に，ブラジル系ニューカマー家族の多くが来日の際に携えていた「帰国の物語」は，滞在の長期化にともなっておよそ 3 通りの展開を見せていた。すなわち，実際に家族での帰国を達成したケース（「帰国の物語」の実現），帰国を志向ないし逡巡しながら日本での生活を続けているケース（「帰国の物語」の継続），帰国志向から永住志向へと変わったケース（「帰国の物語」の転換）である。「帰国の物語」が継続される背景には，滞日の長期化にともなって日本でもブラジルでも上昇移動が困難というジレンマに陥っている親自身の事情と，子どもの成長にともなって教育達成や職業達成が家族にとって重要な関心事項になってきているという事情があった。

第二に，第二世代は，第一世代が形成・維持してきた「帰国の物語」に巻き込まれながらも，独自のやり方でそれを相対化しつつ，自らが置かれた現実にふさわしい距離の取り方を模索していた。親の出稼ぎに正の効果が認められる場合，「帰国の物語」は積極的に継承され，第二世代自身の出稼ぎの肯定につながっていた。逆に，親の出稼ぎに負の効果しか認められず，第二世代自身も日本での生きにくさを感じている場合，「帰国の物語」は消極的なかたちで継承され，日本からの脱出を図るための拠り所とされていた。他方，第二世代が「帰国の物語」を否定し永住を

志向するケースにおいては，継続された「帰国の物語」を生きる第一世代と自らの立ち位置の明確な差異化がおこなわれる場合と，第一世代自身も日本永住を選択し「帰国の物語」を否定する場合があった。さらに，第二世代が固有の資源や経験を獲得することを通じて，親がとらわれる帰国かホスト国への定住かという枠組みを超えた移動の物語へと「帰国の物語」を再編するケースも存在した。

第三に，第二世代が「帰国の物語」に対して示す反応は，親の出稼ぎへの評価だけでなく，第二世代自身の実際の「帰国」経験によっても形成されていた。親族訪問を中心とした観光としての「帰国」であれ，人生観を変えるほどの転機としての「帰国」であれ，ブラジルに対する何らかのイメージを形成し，「帰国の物語」について検討するため材料を提供しうるという点では共通していた。観光としての「帰国」は，とりわけ子ども期には親戚からの歓待などを通じて，ある種の心地よさをともなって経験されるが，青年期に入ると，できることが限られることによる倦怠感や違和感がそれに加わることもあった。他方，「帰国」が第二世代の帰属意識を大きく変えた転機として語られることもあった。「帰国」をきっかけにブラジル人の魅力を発見し，かれらに対する帰属意識を強くすることがある一方で，現地の人びととの間で生じた文化的な摩擦がブラジルに対する否定的な感情を引き起こし，帰属意識の喪失をもたらすと同時に，日本への志向を再確認するというケースもあった。また，「帰国」経験が，帰属すべき既存の集団が不在であるとの認識をもたらし，自らが置かれた現実にふさわしい帰属集団の形成へと第二世代を向かわせる契機となる場合もあった。

では，これらの知見からいかなる含意を引きだせるだろうか。第一に，第二世代の経験を第一世代の経験との関係において理解することの重要性をあげることができる。ブラジル系ニューカマー第一世代が形成・維持する「帰国の物語」は，出身国と移民先での自らの状況を絶えず比較する作業を通じて確保される「二重の準拠枠組み」（Guarnizo 1997）によって特徴づけられる。第二世代は多くの場合，親が保持する「二重の準拠枠組み」のもとで成長することになるわけだが，親とちがって比較のための具体的対象を欠くかれらは，さしあたり親の生活実態を通してこの枠組みの有効性を評価するしかない。そのようにしてなされた評価に，第二世代自身が獲得した資源や経験が加わり，自らが生きる空間をどのように構成するかが模索されていくのである。

第二に，第二世代の帰属意識のありようについて空間的移動と時間的移動の両面に注目しながら理解することの重要性をあげることができる。日本生まれないし日本育ちであっても，第二世代の帰属意識の形成は日本の環境においてのみなされるわけではない。本稿でも確認されたように，対象としたブラジル系ニューカマー第二世代の多くが，成長過程で1回から複数回の「帰国」を経験しており，その経験が帰属意識の形成にさまざまな効果をもたらしていた。そして，そのようにして形成された帰属意識が，翻ってホスト国である日本での位置取りに少なからず影響をおよぼしていた。さらに，第二世代にとっての「帰国」の実践や意味がライフコースを通じて変化しうる点も重要である。トランスナショナルな活動のありようがライフステージに応じて変化しうるとのレヴィットの指摘は（Levitt 2002），本稿においてもあてはまると言えるだろう。青年期にさしかかれば，単なる親族訪問のための「帰国」には飽きたらなくなり，行動や経験の範囲を広げたいという欲求が生じる場合がある。また，青年期は特定の集団への帰属意識をもつことがとくに重要性を帯びる時期であることに鑑みれば（Wessendorf 2013,p.11），「帰国」がおよぼす影響も相対的に大きなものになると思われる。第二世代の帰属意識の形成やその効果を，このように移動や変化に開かれたものとして理解する必要があるだろう。

＜注＞

（1）後者の意識と来日後にかれらが「外国人」として経験する現実との間の齟齬に注目したのが, Tsuda（2003, 2009）の「エスニックな帰還」（ethnic return）に関する議論と言えるだろう。

＜参考文献＞

Guarnizo, L.E. 1997,“The Emergence of a Transnational Social Formation and the Mirage of Return Migration among Dominican Transmigrants” *Identities*.4(2):281-322

ハヤシザキカズヒコ・山ノ内裕子・山本晃輔　2013,「トランスマイグラントとしての日系ブラジル人―ブラジルに戻った人びとの教育戦略に着目して」志水宏吉・山本ベバリーアン・鍛治致・ハヤシザキカズヒコ編『「往還する人々」の教育戦略―グローバル社会を生きる家族と公教育の課題』明石書店,pp.206-267

King, R. and Christou, A. 2014,“Of Counter-Diaspora and Reverse Transnationalism: Return Mobilities to and from the Ancestral Homeland” in King, R., Christou, A. and Levitt, P. (eds.), *Links to the Diasporic Homeland:Second Generation and Ancestral 'Return'Mobilitieas*, 1-16, London:Routledge.

King, R., Christou, A and Ahrens, J. 2014,“'Diverse Mobilities':Second-Generation Greek-German Engage with the Homeland as Children and as Adults” in King, R. ,Christou, A. and Levitt, P. (eds.), *Links to the Diasporic Homeland:Second Generation and Ancestral 'Return' Mobilitieas*, 33-51, London:Routledge.

児島明 2006,『ニューカマーの子どもと学校文化―日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー』勁草書房.

児島明 2008,「在日ブラジル人の若者の進路選択過程―学校からの離脱／就労への水路づけ」『和光大学現代人間学部紀要』第 1 号, pp.55-72.

Levitt, P. 2002, “The Ties That Change:Relations to the Ancestral Home over the Life Cycle ” in Levitt, P. and Waters, M. (eds.) *,The Changing Face of Home:The Transnational Lives of the Second Generation,* 123-144, New York:Russel Sage Foundation.

Levitt, P. 2009, “Roots and Routes: Understanding the Lives of the Second Generation Transnationally” *Journal of Ethnic and Migration Studies*, Vol.35, No.7, 1225-1242.

Levitt, P. and Waters, M. (eds.) 2002, *The Changing Face of Home:The Transnational Lives of the Second Generation*, New York:Russel Sage Foundation.

Portes, A. and Zhou, M. 1993, “The New Second Generation:Segmented Assimilation and Its Variants” *Annals of the American Academy of Political and Social Science,* 530,74-96.

Portes, A. and Rumbaut, R.G. 2001, *Legacies: The Story of the Immigrant Second Generation,* New York:Russell Sage Foundation.

Tsuda, T. 2003, *Strangers in the Ethnic Homeland:Japanese Brazilian Return Migration in Transnational Perspective*, New York:Columbia University Press.

Tsuda, T. 2009, “Global Inequities and Diasporic Return:Japanese American and Brazilian Encounters with the Ethnic Homeland” in Tsuda, T.（eds.）,*Diasporic Homecomings:Ethnic Return Migration in Comparative Perspective,* 227-259 ,California, Stanford University Press.

Vathi, Z. and King, R. 2014, “Return Visits of the Young Albanian Second Generation in Europe:Contrasting Theme and Comparative Host-Country Perspectives” in King, R., Christou, A. and Levitt ,P. (eds.), *Links to the Diasporic Homeland:Second Generation and Ancestral 'Return' Mobilitieas*, 53-68,London:Routledge.

Wessendorf, S. 2013, *Second-Generation Transnationalism and Roots Migration: Cross-Border Lives*, Ashgate.

Wolf, D.L. 2002, "There's No Place Like'Home':Emotional Transnationalism and the Struggle of Second-Generation Filipinos" in Levitt, P. and Waters, M.（eds.）,*The Changing Face of Home: The Transnational Lives of the Second Generation*, 255-294, New York:Russel Sage Foundation.

山本晃輔　2014,「帰国した日系ブラジル人の子どもたちの進路選択―移動の物語に注目して」『教育社会学研究』第 94 集, pp.281-301.

山ノ内裕子　2016,「ブラジルへ帰国した日系人の若者たちの進路とエスニック・アイデンティティ―トランスマイグラントとしての経験から」『関西大学人権問題研究室紀要』第 72 号, pp.23-46.

付記　本研究は，平成 26～29 年度科学研究費補助金（基盤研究（B））「ニューカマー第二世代の義務教育卒業後のライフコースと次世代形成にかかわる総合的調査」（課題番号 26285193，研究代表者：角替弘規）による研究成果の一部である。

付表　調査対象者の概要

対象	年齢	性別	初来日年	初来日年齢	滞日年数	帰国回数	帰国時期（期間）	帰国理由	学歴	習得言語	現職	希望する職業	将来の居住志向	親の来日経緯	親学歴	親現職	親現居住地	親居住志向	「帰国の物語」（第一世代）	「帰国の物語」（第二世代）
Ｂ１	23	女	日本生まれ	日本生まれ	18年	数回	？歳（数回）、17歳（5年）	親〔仕事〕（17歳）	大学中退（ブラジル）	日・ポ	通訳・翻訳（小中学校）	農業	ブラジル	出稼ぎ	父：小卒 母：小卒	父：牧畜業（在伯） 母：不明(在伯)	父：ブラジル 母：ブラジル	父：ブラジル 母：ブラジル	実現	継承(積極的)
Ｂ２	23	男	1997	4歳	14年	4	5歳（数週間）、？歳（数週間）、？歳（数週間）、17歳（5年半）、	病気治療（5歳）、親〔仕事〕（17歳）	中卒	日・ポ・英	工員	農業	ブラジル	出稼ぎ	父：高卒 母：大学中退	父：パー経営（在伯）　母：パー経営（在伯）	父：ブラジル 母：ブラジル	父：ブラジル 母：ブラジル	実現	継承(積極的)
Ｂ３	30	女	1996	11歳	19年	1	25歳（2ヶ月）	遊びに（25歳）	高卒（定時制）−ブラジル通信制大学受講中	日・ポ・英	英会話講師	英語教室開設	ブラジル	出稼ぎ	継父：大卒 母：高卒	父：工員 母：工員	父：日本 母：日本	父：ブラジル 母：	継続	継承(消極的)
Ｂ４	26	女	1993	4歳	20年	2	小6（3年）、25歳（1ヶ月）	親〔仕事〕（小6）、親族訪問（25歳）	中卒（ブラジル通信制）	日・ポ	多文化市民メディア	見通せず	日本＜ブラジル	出稼ぎ	不明	父：無職 母：工員	父：日本 母：日本	父： 母：ブラジル	継続	継承(消極的)
Ｂ５	24	女	1999	8歳	11年	2	16歳（4年半）、23歳（10ヶ月）	親〔「疲れた」〕（16歳）、子育て環境の改善（23歳）	高卒（ブラジル）	日・ポ	通訳・翻訳（小中学校）	現職継続、歌手（ブラジル）	日本＜ブラジル	出稼ぎ	不明	実父：モデル（在伯）　継父：大工　母：専業主婦	実父：ブラジル継父：日本 母：日本	実父：ブラジル継父：	継続	継承(消極的)
Ｂ６	21	女	1996	1歳半	19年	1	小2（1年）		大学在学中	日・ポ・英	通訳（国際交流協会）	外国人相談窓口	日本	出稼ぎ	父：高卒 母：高卒	父：溶接 母：工員	父：日本 母：日本	父：ブラジル 母：ブラジル	継続	否定
Ｂ７	27	女	1991年	3歳	22年	2	19歳（2年）、25歳（6ヶ月）	出産後のサポートを求めて（19歳）、親権をめぐる裁判（25歳）	中卒	日・ポ・ス	旅行会社	外国人のための教育施設設立	日本	出稼ぎ	父：中卒 母：小途中	父：自動車修理 母：不明(在伯)	父：日本 母：ブラジル	父：ブラジル 母：ブラジル	継続	否定
Ｂ８	24	女	1997	5歳	16年	3	小4（10ヶ月）、中3（2年）、19歳（1年）	親〔家の改築〕（小4）、親〔起業〕（中3）、親〔地震〕（19歳）	高卒	日・ポ	営業（ブラジル食品会社）	通訳	日本	出稼ぎ	父：小卒 母：中学校中退	父：解体工事 母：工員	父：日本 母：日本	父：ブラジル 母：日本	継続	否定
Ｂ９	20	男	1997	1歳	15年	3	5歳（10ヶ月）、10歳（2年）、15歳（7ヶ月）	親〔家の改築〕（5歳）、親〔起業〕（10歳）、親〔地震〕（15歳）	高卒	日・ポ	接客（携帯ショップ）	店長か外国人指導担当教官	日本	出稼ぎ	父：小卒 母：中学校中退	父：解体工事 母：工員	父：日本 母：日本	父：ブラジル 母：日本	継続	否定
Ｂ１０	31	女	1988	3歳	28年	0			大卒	日・ポ	ネット販売（アパレル）	ブラジル食器等の販売	日本＞ブラジル	スポーツ指導	父：大卒 母：大卒	父：スポーツ教室コーチ 母：在住外国人支援	父：日本 母：日本	父：ブラジル 母：ブラジル	継続	否定
Ｂ１１	25	女	1990	2ヶ月	25年	0			大学中退	日	ネット販売（靴メーカー）	映画監督	日本＞ブラジル	スポーツ指導	父：大卒 母：大卒	父：スポーツ教室コーチ 母：在住外国人支援	父：日本 母：日本	父：ブラジル 母：ブラジル	継続	否定
Ｂ１２	21	男	2007	12歳	9年	0			大学在学中	日・ポ・中	コンビニ	給料のよい正社員	日本？	出稼ぎ	父：高卒 母：大卒	父：工員 母：工員	父：日本 母：日本	父：日伯半々 母：日伯半々	継続	否定
Ｂ１３	26	女	1998	9歳	17年	1	中2（6ヶ月）	祖父の手術（中2）	大卒	日・ポ・英	通訳	多国籍企業	第三国もあり	出稼ぎ	不明	父：工員 母：工員	父：日本 母：日本	父：ブラジル 母：ブラジル	継続	再編
Ｂ１４	25	女	1992	2歳	17年	2	9歳（6年）、22歳（3週間）	親〔貯金達成〕（9歳）、親族訪問（22歳）	専門学校卒	日・ポ・ス・英	販売・マネージャー（アパレル）	独立して起業	第三国もあり	出稼ぎ	実父：不明 継父：大卒 母：高卒	実父：農業（在伯） 継父：工場勤務 母：介護	父：日本 母：日本	父：ブラジル 母：ブラジル	継続	再編
Ｂ１５	23	女	1996	2歳	21年	5	4歳（6ヶ月）、6歳（3ヶ月）、小5（3ヶ月）、中2（3ヶ月）、大1（1ヶ月）	親族訪問（すべて）、母の運転免許更新（6歳）	大学院在学中	日・ポ・ス・英	翻訳・マーケティング・PR	研究者、国際機関（IMO等）	第三国もあり	出稼ぎ	父：小卒 母：ブラジル通信制大学院受講中	父：工員 母：ブラジル人学校の校長	父：日本 母：日本	父：ブラジル 母：ブラジル	継続	再編
Ｂ１６	25	男	1994	3歳	25年	3	9歳（6ヶ月）、中3（3ヶ月）、24歳（3ヶ月）	母の病気治療（中3）、親族訪問〔高齢の祖父〕＋将来の帰国を検討（24歳）	大卒	日・ポ・ス・英	無職（転職準備中。前職は家電量販店で販売）	貿易関係	日本/英語圏	出稼ぎ	父：中卒 母：中卒	父：工員、牧師 母：工員	父：日本 母：日本	父：ブラジル 母：ブラジル	継続	再編
Ｂ１７	19	男	2007	11歳	9年	0			大学在学中	日・ポ・ス・英	ゲームセンター	海外営業職	第三国もあり	出稼ぎ	父：高卒 母：大卒	父：工員 母：工員	父：日本 母：日本	父：日伯半々 母：日伯半々	継続	再編
Ｂ１８	24	男	1995	3歳	21年	数回	数年に1回（数ヶ月）、19歳（数ヶ月）	遊びに	高校中退	日・ポ	営業（リフォーム会社）	肉体労働以外	第三国もあり	出稼ぎ	父： 母：	父： 母：工員	父：日本 母：日本	父： 母：ブラジル	継続	再編
Ｂ１９	32	男	1991	6歳	25年	3	小4（短期）、小6（短期）、大学（1年）	親族訪問（小4、小6）、病気治療（大学）	大学中退	日・英	カメラマン	現職の充実	日本	出稼ぎ	実父：不明 継父：中卒 母：音大卒	実父：不明 継父：派遣会社運転手母：専業主婦	父：日本 母：日本	父：日本 母：日本	転換	否定
Ｂ２０	32	男	1992	8歳	24年	3	11歳(数ヶ月)、15歳(数ヶ月)、29歳(2週間)	祖父の死去(29歳)	高卒	日・ポ・英	接客（居酒屋）	未定	日本	出稼ぎ	父： 母：高卒？	父：工員 母：バイト	父：日本 母：日本	父：日本 母：日本	転換	否定
Ｂ２１	29	女	1992	4歳	24年	3	？歳、9歳（3ヶ月）、26歳（2週間）	遊びに（？歳、9歳）、祖父の死去（26歳）	中卒	日	訪問入浴介護	現職継続	日本	出稼ぎ	父： 母：高卒？	父：工員 母：バイト	父：日本 母：日本	父：日本 母：日本	転換	否定
Ｂ２２	22	女	1997年	3歳	14年	1	17歳（4年）	親〔仕事〕（17歳）	高卒（ブラジル）	日・ポ・ス・英	通訳・翻訳（小中学校）	教育職	日本	出稼ぎ	父：不明 母：高校中退	父：工員 母：工員	父：日本 母：日本	父：日本 母：日本	転換	否定
Ｂ２３	29	男	1992	3歳	24年	5	7歳（1ヶ月）、11歳（1ヶ月）、13歳（6ヶ月）、22歳（1ヶ月）、24歳（1年半）	親族・教会訪問（すべて）、ブラジルに住んでみたい（24歳）	高卒	日・ポ	人事の委託管理	本格的な通訳	日本	布教	父：専門学校卒 母：専門学校卒	父：牧師 母：牧師	父：日本 母：日本	父：日本 母：日本	−	否定
Ｂ２４	26	女	1992	1歳	24年	5	5歳（1ヶ月）、9歳（1ヶ月）、12歳（4ヶ月）、20歳（1ヶ月）、21歳（1ヶ月）	親族・教会訪問（すべて）、母の運転免許取得（12歳）	専門学校卒	日・ポ	人事の委託管理	未定	日本	布教	父：専門学校卒 母：専門学校卒	父：牧師 母：牧師	父：日本 母：日本	父：日本 母：日本	−	否定

＊言語：日＝日本語、ポ＝ポルトガル語、ス＝スペイン語、英＝英語、中